

【目的】能装束は日本の染織史を雄弁に物語るものであり、その時代時代の染織技術の粋、渾心の意匠を表出している。そこには当然ながら、日本の美意識が介在しており、発想形式の拠り所となっている。本研究では、日本的造形意匠の中から能装束を取り上げ、ビジュアル・デザインの観点から、造形遺産という認識に立って、現代のデザイン・ソースとして再評価し、その表現形式上の手法の特質を探ることを目的としている。

【方法】能装束の完成期である江戸時代中期以降、江戸時代後期までを中心に、形状をほぼ一にする女役の表着を対象とし、それらの能装束のデザインについて、表現形式上の要素をモチーフ、構成、カラリングの3つの観点から抽出、分類し、分析表を用いて分析を行った。その際、能装束のデザインにおいても、「多様の統一」という美的形式原理が適合することから、統一の要素と変化の要素に判別して要素を抽出することによって、より明確に表現形式上の手法の特質を導くことができると考えた。

【結果】能装束におけるデザイン展開は、現代に比較すると材質や染織、色などに様々な制約を受けてはいるが、そこから「変形スタイライゼーション」「散点的に見せる二方連続構成」「非現実的多色配色」「かたちと色との対比」などの、多彩な表現形式上の特質的手法を見ることができた。そしてそれらの発想形式には、「名付け」に見られるようなイメージの共有、あるいは大胆さと品位との調和を図る創造性、明晰性よりも混淆への傾向などが考えられた。また、それらの特質的手法を用いたデザイン展開の試みにより、現代に通じる手法の有効性が検証された。